

ある「性同一性障害」者の心理的・関係構造モデル

—くいちがい・つながり・はなれの3つの上位モデルの生成—

莊 島 幸 子

1. 問題と目的

筆者は「女性の身体に強い違和感を持ち男性へと性別を移行することを望む、ある『性同一性障害 (gender identity disorder, GID)』者」とその家族の経験を理解することを目的として、これまで4年^{註1)} にわたって縦断的にインタビューを行い、ナラティブアプローチに依拠して質的な分析を行ってきた(本研究における「GID」は、個人が自らをGIDであると認識している状態を指すものである)。GIDとは、「生物学的性別と性の自己認知あるいは自己意識とが一致しないために、自らの生物学的性別に持続的な違和を感じ、反対の性を求め、時には生物学的性別を己れの性の自己意識に近づけるために性の転換を望むことさえある状態」と医学的に定義される。

従来のGID研究には、3つの問題点があるように思われる。まず、1つめの問題点は、GIDに関する議論は主に医学や法学、脳科学の分野で盛んになされているが、そこではGID者が「患者」なり、「法律の保護にある存在」として自明視されている点である(莊島, 2006)。特に、医学研究では、大学病院やクリニックに受診し、GIDと診断を受けた人のみが研究対象者となる。そして、「病理」を持った「GID患者」として、その病理的行動や心理的側面(例えば、不登校や自傷行為、自殺未遂、対人関係の困難さ)のみに焦点を当て、「GID患者」に内在する問題として説明する。本研究では、そのような視座は取らない。個人を病理を持った「患者」として固定的には捉えずに、GIDそのものではなく、GIDを抱えながら生きる人間と家族の関係に焦点を当てた。

2つめの問題点は、GID者が生きる社会的なコンテキストが考慮されていない点である。具体例を挙げると、GID者の特徴として、「社会性が低いこと」や「依存性が高い」などの特徴が抽出されてきたが、このような結果が生み出されるコンテキストは果たして何であろうか。それは医療のコンテキストであり、医療に組み込まれた心に対する見方である。しかし、社会性が低いことや依存性が高いという特徴は心理テストを施し、統計処理によって数値化されたデータに過ぎない。当事者の視点に立てば、別の解釈が可能かもしれない。当事者が生きている現実の複雑なコンテキストを抽出することなしに、個の病理的側面を前面に出した結論を述べるのはあまりに一面的である。

GID者の家族関係に関する先行研究においても、古くから家族の病理性が説明されてきているが、これについても同様のことがいえる。一歩先に進み、家族はGID者とともにいかに生きているのかという点に目を向ける必要がある。上記2つの問題点は、GID者をみる視点に関する問題提起である。

3つめの問題点は、研究方法や分析に関わる問題である。日本でも、主に医学研究を中心として、GID者の事例研究がいくつか報告されている。学校現場における当事者への対応や医療現場でのカウンセリングを扱ったこれらの報告は、当事者理解や対応の模索のために価値ある研究である。しかし、研究の営為という視点から検証すると、それらの報告が事例の記述と解釈に終始していることから、研究ではなく事例報告のレベルにとどまっているといわざるを得ない。『モデル構成』のために、研究の場『現場』で研究する心理学」、すなわち「モデル構成的現場心理学」を提唱したやまだ（1986）は、質的なデータについて記述や解釈を行うだけでは不十分であるとし、現象のよりよい理解にはモデル化が必要であると強調した。この場合のモデル化は、「特定の現場に根ざすローカリティをもちながら、他者と共有できるような一般化」を行うことを指す。西條（2003）は、モデル構成的現場心理学がモデル構成を方法論の中核に据えた点について、(1)曖昧な記述に終止しかねない質的研究に「モデル」という検討可能な実体を与え、(2)個性記述で終わりがねない質的研究を、モデルに基づき一般化を目指すものとして位置づけることが可能になったとしている。さらに、齊藤・岸本（2003）は、事例研究を行う際、(1)個別性の尊重、(2)プロセスの検討、(3)関係性への注目、(4)仮説生成の4つの視点を重視し、事例の個別性を尊重しつつ、それを説明する仮説（モデルと言い換えられよう）を生成することを奨励している。

GID者が自明視されている・GID者が生きるコンテクストが考慮されていない・GIDの事例報告にとどまっているという3点を乗り越えるべき問題として、筆者は、GID者と家族の経験に関する5つの質的研究を行った（表1を参照されたい）。本論では、5つの研究を理論的に発展させることを目的とし、モデル生成を深化させ、統合させる。葛西（2005）は、モデル構成研究において、相互に異なる部分をもつ複数のモデルが並び立つ「モデルの多重併存事態」が現象の理解を促進し、「モデルの多重併存事態」を全体的に統括しうるといわば「上位モデル」をもたらす可能性について議論し、研究の1つの方向性として指し示した。本論では、5つの研究の中で生成されたモデルを再検討し、それらを関係性に関する3つの機能をもった上位モデルへと分類する。

5つの研究から見出されたモデルは、研究が行われた当時のGID者および家族の語りの分析から明らかにされたものである。各研究で個別に見出されたモデルは、5つの研究全体の文脈から吟味する必要がある。特に、本研究の主要な参加者であるGID者には、3年にわたる6回のインタビューのなかで、自己についての語りに大きな変化がみられた。研究1（2006年3月）では、自分自身について「私はGIDである」と語り、性別適合手術による性器の再構築を望んでいた。しかし、研究3（2008年3月）では、「私はGIDである」と語ることに躊躇し、精神科での治療からも足が遠のき始めている。本研究では、分断されていたGID者の経験に関する語りと語りの時間軸をつなぎ合わせ、それぞれのモデルを再検討する。それによって、GID者として生きる経験世界やGID者と共に生きる経験といった関係世界のさらなる理解を深めることが本論の目的である。

表1. 「GID」者と家族の経験理解を目的として行われた5つの研究

研究	研究の目的
研究1 (湧井, 2006)	GIDであると認識するまでの過程、および他者にカミングアウトすることを決意、表明し、その後、他者と共生していく生き様を当事者の内側の視点からすくい取ることを目的とした。
研究2 (荘島(湧井), 2007))	インタビュー場面という相互対話的状況の分析からGID者が自己をいかに呈示しようとしているのかということについて明らかにすることを目的とした。
研究3 (荘島, 2008b)	自らをGIDと認知し、精神科治療を受け始めた当事者が、徐々に治療から遠のき、GID者と語らなくなっていく過程を捉えることを目的とした。
研究4 (荘島(湧井), 2006))	従来の研究で看過されがちであった《語り得ないもの》に焦点を置き、研究1では分析に用いなかったGID者からもらった小説やメールも分析の対象として、研究1の再分析を行った。
研究5 (荘島, 2008a)	GID者とその家族の間で、「GID者として生きる」「性別を移行する」ことがどのように経験されているか明らかにすることを目的とした。

2. 方法

研究協力者

研究協力者は、2001年にGIDと診断されたハル（研究協力時22歳－25歳：2002年－2005年）、母親のソラ（研究協力時55歳－56歳：2003年－2004年）、妹のアキ（研究協力時20歳：2005年）、父親のマサ（研究協力時60歳：2005年）の1家族である。全て仮名である。以下、敬称を略す。

インタビューの概要と各研究の関連

表2に、インタビューの概要と各研究の関連について示した。また、各研究がどのインタビューデータを用いて分析されたのかについても表記した。

表2. インタビューの概要と各研究の関連

インタビュー 実施日	2003.3	2003.5	2003.9	2004.6	2004.9	2004.10	2004.11	2005.6	2005.8
インタビュー 対象者	ハル (第1回)	ハル (第2回： パートナー 同席) ソラ (第1回)	ハル (第3回)	ソラ (第2回)	ハル (第4回)	ソラ (第3回)	ハル (第5回)	ハル (第6回： アキ同 席)	アキ (第1回) マサとの 接触
各研究で用いた インタビューデ ータ	← 研究1、研究2、研究4 →				← 研究3、研究5 →				

分析

各研究においては、ハルと家族の語りを単に記述、解釈するのではなく、ある一定の構造を持ったモデルとして検討可能な実体（西條, 2003）とすることを重要な課題とした。各研究で生成されたモデルは、語りから見出された心理的な構造であり、ハルと他者との関係を表す構造でもある。よって、心理的・関係構造モデルと呼ぶ。先に問題点として挙げたGID者を自明視しない・GID者が生きるコンテクストが考慮されていないという点について、他者との関係性を重視する立場に立ってモデル生成を行った点が、一連の研究の特色である。また、GIDを有する個人の分

析については、「自分が何者か分からない」といった物語の混乱が人生の発達初期から見られることが一部のGID者の特徴とされるが、そのような物語化されない要素群が個において、いかなる関連と変容を展開しているのかという点にも着目した。つまり、各研究における心理的・関係構造モデルは、個における経験や他者との関係性の動きを説明する動的モデルであることが重要とされた。また、各研究の動的モデルは、GID者個人だけではなくGID者和他者との関わりにも着目するため、これまで個人の経験ばかりに目を向けがちであった質的研究に対して、家族の経験を同等に扱うことで、扱う範囲を拡張化した。これにより、互いに経験されることで再構成される関係世界に焦点が当てられるのである。本論のように、上位モデルとして動的モデルを生成することで、いつ、どのような他者との文脈で、どのような苦悩を互いに抱えるのか、そしてその意味づけや関係性はいかに変容しているのかについて、そのプロセスを整合的に説明することが可能となる。これらは、斉藤・岸本（2003）が事例研究を行う際に重視する（1）個性性の尊重、（2）プロセスの検討、（3）関係性への注目、（4）仮説生成の4つの視点を全て満たすものであり、実践的観点からも意義があると思われる。

なお、これらのモデルは、理論からトップダウンに導き出されたモデルではなく、あくまでハルとの対話、自助グループへの参加や他の当事者との話し合いといった地道なフィールドワークに基づいたモデルであり、現場に根ざすローカリティを有するものである。

3. 結果

各研究で生成された心理的・関係構造モデルは、それらを統合する上位モデルとして、①くいちがい構造、②つなぎ構造、③はなれ構造の3つの構造へとまとめあげられた。表3は、各研究の心理的・関係構造を上位モデルの3構造へと分類したものである。なお、心理的モデルとは、ハルの心理的状态をモデル化したものであり、関係構造モデルとは、ハルと他者の間で生じている関係性をモデル化したものである。各研究の心理的・関係構造モデルは《 》で括って表示し、それらのモデルが見出された研究を（ ）で示す。「」は、研究参加者の発言（もしくは、メール）である。

表3. くいちがい・つなぎ・はなれ構造に含まれる心理的・関係構造モデル

くいちがい構造	つなぎ構造	はなれ構造
<u>心理的モデル</u> 《ダブルペルソナ》（研究1） 《語り得ないもの》（研究4）	<u>心理的モデル</u> 《病気物語》（研究1） 《移行の物語としてのカミングアウト》（研究1）	<u>心理的モデル</u> 《自己物語再組織化過程における私物語の出現》（研究3）
<u>関係構造モデル</u> 《ハル・ソラの病いの悪循環構造》（研究5） 《ハル・ソラの「GID」に関する説明物語の変化》（研究5）	<u>関係構造モデル</u> 《アキからみた家族及び家族への働きかけ》（研究5）	<u>心理的・関係構造モデル</u> （心理的・関係構造の双方を含むモデル） 《距離化行為》（研究2）

あるGID者とその家族の心理的・関係構造モデル1：くいちがいの構造

くいちがいの構造には、次の心理的・関係構造モデルが含まれる。心理的モデルは、《ダブルペルソナ》（研究1）、《語り得ないもの》（研究4）である。関係構造モデルには、《ハルソーラの病いの悪循環構造》（研究5）、《ハルソーラの「GID」に関する説明物語の変化》（研究5）が含まれる。くいちがいとは、文字通り、2つ以上の認識や物語が相互にうまくかみ合っていない、または一致していない状況を示すものである。くいちがいは、自己の内部で心理的次元において生じる場合や、自己の物語と他者の物語といったように對他者間で生じる場合もある。

まず、研究1で生成された心理的構造として、GID認知する以前のハルにみられた《ダブルペルソナ》というモデルがある。《ダブルペルソナ》とは、ハルが入れ子構造になった2つのペルソナを被っている状態を表す心理的モデルである。1つめのペルソナは、第2次性徴を迎え、女性であることが決定的な事実となったハルが、女性への性的指向を持っていたことから同性愛者であるという自分自身を認識したことから、作り上げられた第1のペルソナである。ハルにとって、第1のペルソナである「同性愛者」物語は、ネガティブな意味合いを持ち、他者に隠されるべきものであった。そこで、ハルは、「自分は同性愛者ではなく、ノーマルである」という「Not 同性愛者」物語を他者および自己に向けて語っている。これが第2のペルソナである。2つのペルソナに抑圧されていたハルの物語は「男として扱われたい、男になりたい」という願望であり、また、身体や服装、髪型に関する違和感であった。第1のペルソナである「同性愛者」であることは、ハルに「嫌だ嫌だ嫌だ」という感情を湧きあがらせ、第1のペルソナを隠蔽して第2のペルソナを被ることに對しても「偽者の自分」であるという感情が拭えず、「こんな自分を消してしまいたい」と、ハルは自殺未遂を続けた。この過酷な状況は、ハルがGID認知するまで続けた。ハルの違和感、第1、第2のペルソナの間にはハルの葛藤が見て取れ、心理的なくいちがい構造を呈している。

研究4で生成されたハルの《語り得ないもの》というモデルもまた、くいちがいの構造として説明される。研究4では、ハルの4つの《語り得ないもの》についての事例を提示した。最初の事例は、同性愛者／偽者の自分というくいちがいであり、研究1の《ダブルペルソナ》の様相と類似しており、語られた自己物語の内部にその物語の筋書きとは異なる声が存在することを示した例であった。「同性愛者」としての自己物語を語れば語るほど、ハルの偽者感がより強まるという物語の逆説的構造としても捉えられた。2つめの事例は、他者と共に生きる私／独りで生きる私である。GID認知後のハルは、他者と共生していこうとする語りが多く、語り口調も概してポジティブなものとして筆者の目には映っていた。しかし一方で、ハルはメールを通じて筆者に「すべての人間関係を絶って、誰も知らない土地で、生きていけたらいいのになって思うときがあるんだな。（中略）そんなことを考えているとね、なんか無性に悲しくなってしまうのです」と伝えている。この事例もまた、心理的表出のくいちがいを示す例である。3つめは、現実世界／小説の中の世界に関する事例である。ハルは、筆者の研究に参加してから、筆者に向けて小説を書き綴っていた。現実世界における我々の関係は、緊張も取れ始めた頃であり、GIDについて笑いながら語り合うことが可能な間柄となっていた。あるとき、小説が完成し、筆者に手渡された。その小説では、現実世界とは裏腹に重いテーマが扱われ、小説の中の筆者に向かって、「君はぼくにとってなんなの？」という強いメッセージが向けられていた。この事例にも、現実世界

と仮構世界のくいちがい構造が孕んでいるといえる。4つめの事例は、語りにみられる主語・一人称（主体）の揺らぎである。ハルは、インタビューやメールで、①ぼく、②おれ、③わたし、④自分、⑤その他という5つの一人称の語りヴァージョンを持っていた。また、1つの語りのなかに、「『ぼく』、『わたし』は」というような言い換えや混乱（くいちがい）もみられた。これら4つの事例をもって、《語り得ないもの》をくいちがい構造とみなした。

研究5で見出された《ハルーソラの病いの悪循環構造》および《ハルーソラの「GID」に関する説明物語の変化》のモデルも、くいちがい構造として検討可能である。まず、《ハルーソラの病いの悪循環構造》についてみていく。ハルは、GID認知以前、自己の存在への懷疑や葛藤を繰り返してきた。不登校、身体への違和感、第二性徴の到来といった人生イベントはいずれもGIDによる基本的症状（身体違和）や人の生物学的発達（第二性徴）、社会制度（学校）に関わっているために、ハルにとって回避不能なイベントであった。そして、身体的な違和感や自己の不一致感を和らげるためにハルが取る行動（少しでも男の子らしく見えるような行動）は、常にソラとのトラブルを巻き起こしていた。なぜなら、ハルの行動がソラにとっての問題行動であるだけでなく、社会的にも認められない行動だったからである。その結果、ソラは学校から叱責され、涙を流す日々を過ごしている。ソラは、ハルの「問題行動」を断ち切るために、ハルを叱責するが、その行動がハルの葛藤をさらに増大させてしまう。この悪循環の構造は、ハルの心理的構造を越え、他者との間におけるくいちがいを引き起こしている。そして、そのくいちがいは、ハルとソラそれぞれに対して、互いに切り離された個別の病いの経験を生み出していた。

《ハルーソラの病いの悪循環構造》に引き続いて生成されたモデルが《ハルーソラの「GID」に関する説明物語の変化》である。このモデルによって、ハルのGID認知後、母子それぞれの人生イベントに対する説明物語が変化したことが説明される。ソラは、ハルがGID認知する以前には、諸々の人生イベントに対し、母親としての歩みの物語という説明物語によって自らの人生を意味づけ、物語っていた。一方のハルは、GID認知以前には、自分の身に生じてきた数々の人生イベントを説明する物語を持っておらず、不安定なまま混沌としていた。しかし、この状況は、ハルのGID認知によって一変する。ハルは、GIDという自己の説明物語を得て、混沌としていたそれまでの人生を再構成し、他者にカミングアウトし始める。一方、ハルからカミングアウトを受けたソラは、母親としての歩みという説明物語に、ハルが「GID」であるという突然出現した物語を組み込むことができない。ハルからのカミングアウトによって、ソラは人生の物語の解体を迫られている。ここでも、ハルとソラの物語の生成過程にくいちがいが生じていることから、関係にくいちがい構造が生じているといえるだろう。

あるGID者とその家族の心理的・関係構造モデル2：つなぎの構造

つなぎの構造には、次の心理的・関係構造モデルが含まれる。心理的モデルには、《病気物語》（研究1）、《移行の物語としてのカミングアウト》（研究1）が含まれる。関係構造モデルには、《アキからみた家族及び家族への働きかけ》（研究5）がある。ここでいうつなぎは、2つの次元に分けられる。1つめの次元は、混沌としていた自己についての物語のプロット間が結ばれ、個人にとって意味を成す物語が生成されるといった個人内の心理的次元である。2つめの次元は、自他の関係性の次元であり、自己と他者が関係として結ばれていく、共生するといった関係性が

生まれてくる状況を示している。

研究1で明らかにされた《病気物語》とは、ハルのGID認知以降に語られた「私は『病気』である」という自己物語のことである。《病気物語》は、次の3つの文脈で語られていた。それは、文脈1：对身体・対自分、文脈2：对他者、文脈3：対医療であり、時間の経過とともに文脈1から文脈3へと派生していた。《病気物語》は、文脈1：对身体・対自分においては、①治すもの、治るものとしての身体、②一生メンテナンスが必要な身体、③抱えて生きていけるものとしての身体、④本来男であることへの医者からのお墨付き、⑤「普通の人間」である証明、⑥「マジョリティ」という意味づけを持っていた。つづいて、文脈2：对他者においては、⑦他者に選択肢を与える、⑧病気なら受け入れてくれる、⑨病気を持った者として認知してほしい、⑩治療に関する同意と費用の工面という意味づけを持っていた。最後に、文脈3：対医療に対しては、⑪医療保険の整備、⑫手術に至るまでの時間と費用への不満という意味づけを持っていた。ハルの語りからは、《病気物語》を通して、①から⑫で示されたように、自己や他者に対する意味づけの多様な変化がみてとれた。第一に、文脈1：の对身体・対自分において、《病気物語》とは、幼少期より持続していた得体の知れない身体への違和感が「病気」から来るものであることが判明し、自己とのつながりを育んだ物語である。文字通り、「一生メンテナンス」をしながら「抱えて生きていける」ものとなったことを意味しており、過去、現在、未来との時間的つながりが生まれている。第二に、文脈2：对他者においては、他者とのつながりが持てる見通しや目処がハルのなかに立ち始めている。他者とは、友人であり、家族のことである。第三に、文脈3：対医療においては、医療という社会的制度への要求を、社会と自己とのつながりとしてみることができる。ハルは、《病気物語》を語りながら、自己、他者、社会へとつながりを拡張し、《病気物語》を語るプロセスを経て、実際のカミングアウトへと歩みを進めたことが明らかとなった。したがって、《病気物語》は、心理的かつ関係的にもつなぎの構造として捉えることが可能である。

次に、《移行の物語としてのカミングアウト》について説明する。ハルは、カミングアウトする際に「過去を隠そうとか、女であったことを一切分からんようにしようとかいう発想はない」と断言し、「カミングアウトしても（他者との関係が）前と何も変わらないのが楽」と語っている。ハルは「GIDという病気」であったとしても、「ハル」の人間性は以前と変わることがないことを他者になんとか理解してもらおうとしていた。「病気」であることによって、自己の一貫性を保ち、時間的展望を生み出しながら、「GIDである」とカミングアウトしても他者には以前と変わらない自分として関係性を続けることを願っているのである。このようなハルと他者との関係性は、つなぎの構造として説明される。

また、研究1では、ハルのカミングアウト以前とカミングアウト以降の語りが2つに分断されていることを指摘し、それらをつなぐ移行の物語があるとして、カミングアウトプロセスの分析を行った。《病気物語》を語りながらカミングアウトしていったハルのカミングアウトプロセスそのものが、ハルの語りを意味あるように結ぶつなぎの物語として機能しているのである。

つなぎの構造の3つめに、《アキからみた家族及び家族への働きかけ》に関するモデルがある。まず、アキの語りの分析から見出された、家族との間におけるアキの5つの病いの経験について説明する。アキの病いの経験とは、①幼少期から継続したハルとのすさまじい喧嘩、「憎い」ハル、②目の当たりにしたハルと両親の争い、③入り込めないブラックボックス（アキにとっての

家族についての表現) ④女の子同士ではない姉妹、⑤家族のGID認知、の5つであった。ハルが家族にカミングアウトする以前は、アキは家族に対して周辺的に関与することしかできずにいた。アキにとって家族は何が起きているのか分からないブラックボックス的空間であり、また、鬼のように怖いハルから殴られる場であった。そして、アキは、家族のなかで自分の存在を「見つからないように」することで、家族に居続けることができたのであった。しかし、ハルがGID認知し、家族にカミングアウトすると事態は一変する。アキはハルのカミングアウトに戸惑う母親とハルを媒介する存在として家族の中心に参入していく。ハルとソラがGIDについて沈黙を続ける傍らで、アキはソラの不安を共有し、間接的にハルとソラの間をつなぐ役割を担い始める。アキは、「多分、(ハルは) 周りにはいい人でなくてはいけないみたいなものがあって(家で暴力的な行動をしていたのだろう)」「今思えば(数々の争いごと)しょうがないのかな」とハルを理解するための物語を紡ぎ、きょうだいの関係を修復している。このことから、アキの物語の生成過程や家族のなかでの役割関係も、つなぎの構造としてみる事が可能である。

あるGID者とその家族の心理的・関係構造モデル3：はなれの構造

はなれの構造には、以下の心理的・関係構造モデルが含まれる。心理的・関係構造モデルの双方を含むものとして《距離化行為》(研究2)、心理的モデルとして《自己物語再組織化過程における私物語の出現》(研究3)が挙げられる。はなれには、2つの意味が込められている。1つめの意味は、研究2で紹介した「はなれる」(やまだ, 1987)という概念のもつ意味と同義である。やまだ(1987)は、乳児の発達における大きな変化として静観的認識のはじまりをあげる。そして、静観的認識のはじまりにおいては、[ここ]にいながら、[ここ]から離れたところを見ることができるようになるという意味での「はなれる」はたらきが必要であるという。2つめの意味は、ある人が持っている認識や物語が、もともとの認識や物語から分離していくプロセスを指す。

まず、研究2で、ハルが「今、ここ」で生じているインタビュー場面において、複雑かつダイナミックに自己構築を図る状況から見出された《距離化行為》についてみていく。《距離化行為》モデルは、①他のGID当事者との間で、②自己と身体の間で、③過去の自分との間で、④今、自分がGID当事者として生きていること、という4つの状況において行為として見出されたモデルである。①他のGID当事者との間で行われる距離化行為とは、ハルが他の多くのGID当事者とは考え方が異なっていることを強調する語りや、自分をGID当事者のなかでも少数グループに身を置こうとするような態度をとる行為のことである。特に、ハルが自らと比較するGID当事者集団とは、「(考えや態度が)凝り固まっている」「男役、女役になりたがっている」人たち(ハルから見ると、彼らは男女の固定観念に囚われている人と否定的に意味づけられる)である。次の、②自己と身体との間で行われる距離化では、GID認知後にハルが身体の違和感について、明確にどの部分に違和感があるのか説明可能になるという変化が生じている。GID認知以前には、身体全体に覆いかぶさるごとく強烈かつ曖昧な身体違和感に苛まれていると語っていたハルが、そのような身体から自己を切り離して、違和感について具体的に語れるようになる。3つめは、③過去の自分との間での距離化行為である。ハルの語りには、自己や他者に対し否定的な見方をしていた過去の自己について分析し、反省する語りがある。それは、現在の自己は過去の自己を乗り越えたところに段階的に位置していることを明示している。過去の自分を見下ろし、客観的に

分析する語りもある。ハルは、過去の自己から距離を置き、当時の否定的な思考から解放されていることを筆者に示していると思われた。4つめは、④今、自分がGID当事者として生きているということに対する距離化行為である。ハルはGID認知し、自らを「病気」と意味づけながらも、GIDであることばかりにエネルギーを注ぐ生き方を嫌い、そのような生き方とは一線を画していた。ハルは自らの当事者性を否定し、距離化し、「普通の24歳」であることを強調していた。

これら4つの《距離化行為》モデルは、GIDとして生きる自己やGID¹有する身体、他のGID当事者や過去の自己からはなれようとする行為を意味している。そして、時に現状に対して否定的な見方に陥ったときに、GIDのせいにしてしまう自分を「逃げ」ているとし、それを自覚しているからこそ「こっちに戻ってこれる」（この発言は筆者のものだが、ハルが「そうそう」と同意している）と語っている。はなれの構造は、ハルが今現在生きている自分を客観的に分析し、どの物語にも囚われることなく柔軟に生きていくことを可能にしているといえよう。

はなれ構造をもつ2つめのモデルとして、『自己物語再組織化過程における私物語の生成過程』がある。ハルは、GID認知後、医者から「性同一性障害」であると正式に診断されたことについて「将来男性になる」という未来の自己像・自己物語を確定的なものとする「お墨付き」であると語っていた。しかし、他者との間で対話を積み重ねることによって、環境や状況が安定してくると、逆に「将来男性になる」ことが現実離れした物語となってくる。いまだに身体違和感を抱えてはいるものの、「今の（治療の）スピードだと、『今までの自分』にきょうならできない」と語り、それまでGID治療一直線であった物語からはなれ始め、新たに物語を生成している（私物語の生成）。「今までの自分」という語りは、その語りがなされた時点で過去の自己がまさに生成された瞬間であり、現在の自己との間が文字通りはなれたことを示している。この点は、先述した《距離化行為》（過去の自分との間での距離化行為）にも類似している。

私物語の生成は、単純にそれまでの自己物語からはなれただけではなく、他者と折り合いをつけながら共に現在を生きていこうとするつなぎの構造をも有している。《自己物語再組織化過程における私物語の生成過程》のはなれ・つなぎの構造は、「別に手術しないって決めたわけじゃない」ハルが、医療に対して「スピード」ではなく、「タイミング」を求め、主体的に自分の身体をコントロールしながら生きていこうとする姿を我々に示しているといえるだろう。

4. 考察

これまで行ってきた5つの質的研究（モデル構成研究と言い換え可能である）は、葛西（2005）のいう「複数のモデルが並び立つモデルの多重併存事態」であったといえる。結果では、研究1から研究5において構成された心理的・関係構造モデルを再検討し、くいちがい・つなぎ・はなれ構造という3つの上位モデルへの統合を図った。考察では、くいちがい・つなぎ・はなれの3つのモデルが、ハルや家族のライフストーリーと照らし合わせたときに、いかに機能しているのかみていく。

ハルがGID認知する以前は、ハルの心理的構造（《ダブルペルソナ》や《語り得ないもの》モデル）や母子の関係性（《病いの悪循環構造》）にくいちがい構造が顕著にみられる。ハルが自らをGID認知する転機を迎えると、くいちがい構造からつなぎ構造へとモデルが変化していく。

ハルは、《病気物語》を語りながら、自己の身体とのつながりや時間的一貫性、他者や社会との関係性のつながりを取り戻そうとする語りをしている。つなぎ構造の最も顕著にみられる行為が、GIDであることを他者にカミングアウトすることであった。ハルは、GIDであっても、以前と変わりのない自分を前面に出して語ることで、他者の表象としてのハルに関する現在から未来へのつながりを作り出そうとしているといえるかもしれない。また、ハル自身も、過去に女であることを隠すつもりはないとして、過去から切り離されずに一貫している自己の存在を重要視している。他者との対話を重ねながら、つながりを回復していくハルは、一方ではなれの構造を有しながら、さらなる次元へと進んでいく。身体の切り離しによる違和感の明確化、他のGID当事者との差異化、過去の否定的自己との分断、当事者性の回避といった《距離化行為》を通して、ハルは現在の自分を客観視し、冷静に分析することができるようになっていく。

また、はなれ構造は、はなれることによって、逆に他者との関係を構築していく可能性を持っている。例えば、身体を切り離した語りは、自分の身体の「病気」である部分をより明確にし、他者に語る言語をハルに持たせている。そして、ハルの人格的な部分については、この先も変化することがないことを他者に向かって証明する機能を持つ。まさに、心身を切り離す作業である。得体の知れない違和感をひとまず自己の身体に物語として組み込んだ後に（つなぎ構造）、再び切り離すのである（はなれ構造）。他のGID当事者との差異化という《距離化行為》も、同様につなぎ構造の機能をもつ。ハルは、考えの凝り固まった、男役、女役を熱望する一部のGID当事者を引き合いに出し、自分は彼らとは異なるということを語ることで、GIDではあっても、より付き合いやすい（つながりやすい）自己像を他者に提示しているといえよう。

ハルは、GID認知し、カミングアウトすることで、自分の生き方を定め、また他者と共生していくことが可能になった。一方、母親の立場であるソラは、それまでに歩んできた自己物語の解体の危機に迫られてしまう。ハルからのカミングアウトによって、母子の物語構造が逆転するのである。このような事態は、GID者と母親の関係性が、互いの人生のいずれの状態においてもくいちがい構造が生じてしまう関係性にあることを意味している。

GID者の家族のなかで、ハルのカミングアウトによって家族とつながることができるようになった者が妹のアキであった。ハルからのカミングアウトを受けるまでは、家族という存在や家族の状況そのものが、アキにとっては理解困難で得体の知れないもの（ハルの身体違和感と平行である）であった。しかし、ハルがGIDであり、これまで苦悩していたことを知り、アキのなかで混沌としていた全ての物語がつながり、事態の一部始終を心に収めることができたのである。そして、アキはくいちがいを起こしている母子の関係性をつなぐ役割を果たしていく。

ここでハルのGID物語は終わらない。GIDであることを他者にカミングアウトし、軋轢が生まれることがあっても、地道に対話を積み重ねるプロセスのなかで、ハルはそれまでのGID物語からさえもはなれていくこととなる。そして、身体違和感を抱えながらも、「『今までの自分』にさようならできない」と語り、新たに私物語を生成している。現状では、ハルは手術を行うかどうかを決めておらず、未来にあるべき自分を決定していない。これからどのように生きていくのかという問題を自らの内に抱えつつ、その都度他者と話し合いながら、ときに傷つき、自身を揺り動かされながら日常生活を送っている。いうなれば、それは「ゆらぎ」の構造とでもいえるものかもしれない。ゆらぎとは、どの物語、どの状況にも完全に自分自身をフィット、コミットさせ

ることなく、ずれを内包したモデルである。"ゆらぎ"という観点からハルの語りを眺めると、幼少期から性別や身体の違和感（これはハルのアイデンティティをゆらがせるものである）を抱えながら自己物語を見つけようとしてきたハルの生き様は、まさに大きなゆらぎのうねりの中にあるとみることができる。どの自己物語にも安住することのないハルは、ときおり「もうどうでもいいじゃん」「めんどくさい」といって、自己構築プロセスそのものからはなれようともしている。もはや、ハル自身、違和感のある身体も含めて物語化されることへの抵抗を示しているようにさえ、筆者には映る。ソラもまた、ハルをどのように受け止められるかと模索し、日々、気持ちが揺らいでいる。ソラにとっては、ハルがGIDであることは目前の世界の常識や安定性が覆される経験であり、事態を理解する物語は容易には生まれそうにない。しかし、見方を変えれば、こうもいえる。幼少期より母子の関係性にはくいちがいがみられたが、長い年月を経て、はじめてゆらぎの同期をみせているのである、と。そして、アキというつなぎモデルの人物を媒介して、母子はゆらぎながらもつながっていく可能性を持っているのである。

5. 展望

本論では、個々の研究から生成されたモデルをさらに上位モデルとして統合した。また、考察では、ハルのライフストーリーの流れに沿って、それぞれの持つモデルの機能について再検討した。個々のモデルを全体の流れのなかで捉え直すことで、よりモデルの機能が増し、GID者とその家族の経験世界の理解を深めることができた。

展望では、まず、研究におけるモデル構成のあり方について述べ、次にGID者と家族への実際の支援を検討する。モデルおよびモデル構成については、様々な研究者がそれぞれの研究を行う中で、やまだ（1986）を含め、独自の論を展開してきた。やまだは、モデル構成について言及するとき、モデルの説明として「関連ある現象を包括的にまとめ、その一つのまとまったイメージを与えるようなシステム」（印東，1973）を引用している。やまだ（2002）は、モデルの機能として「個々の事象を見る見方が変わり、新たな仮説や実証を発展的に生み出していく生成的な機能を持つこと」（p.108）を特に強調している。また、「半具象」と呼ばれるモデルによって、抽象モデルでもなく、写實的に写し取られた具象モデルでもなく、具体的現象をできるだけ単純化しながら具体性を保持するための必要最小限の有意義情報を含んだモデルを提示する表現方法を編み出している（やまだ，2002）。このようなモデルの提示が、イメージからイメージへの比喩的移行や生成的増殖を生みやすくすると述べている。M-GTA（Modified Grounded Theory Approach 修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチ；木下，2003，2007）^{註2)}において望ましいとされるモデルは、事象の変化を説明する動的なモデルである。つまり、事象を分類するモデルではなく、そのモデルによって次の行動が予測される動的な構造をもつモデルである。次に起こりうることを予測するモデル構成を目指す研究には、臨床実践における事例研究も含まれる。実践を伴う現場における事象理解には、動的なモデル構成を目指す立場が有用である。斉藤・岸本（2003）は、事例研究を「一事例についてのプロセスから詳しいデータを収集し、収集されたデータの分析から、何らかのパターン、構造化説、理論モデルなどを生成することを試みるタイプの研究法」とする。ここでの理論モデルという言葉は、斉藤・岸本（2003）によ

れば、実践の中で刻々と体験される現象から、帰納あるいは連続比較などの方法論によって生成、継承される、現場のコンテキストに密着した理論である。本論で見出された、くいちがい・つなぎ・はなれ構造は、動的な構造であり、次の行動を予測しうる可能性を包含している。

最後に、本論で生成された各モデルおよび上位モデルは、GID者と家族への支援に関してどのような手がかりを我々に与えてくれるのであろうか。これまでの支援は、GID者への個別の支援が主であった。個別の支援では、GID者は問題を抱えている人とみなされ、医療のレールに乗って社会にいち早く適合する生き方ができるようになることが目標とされた（東，2005）。医学の見地からみた社会適合とは、すなわち「性別を変更し、性別に見合った外性器を持ち、その性別らしく振舞って生きる」ということである（針間，2008）。

しかし、本論の上位モデルは、GID者の心理的次元だけでなく、関係的次元にも及んでいることから、個別支援だけでなくGID者と周囲の関係性を扱う環境調整を主とした多元的な支援を検討することが可能になる。また、くいちがい・つなぎ・はなれ構造がカミングアウトを境に生じることが各分析から見出されていることから、カミングアウトを中心とした環境調整が、GID者と周囲の関係の質を向上させる要因となりうる。さらに、ハルの事例の場合、当初、身体的に性別移行を望むGID者と思われていたが、縦断的インタビューのなかで徐々に医療との齟齬を感じようになっていった。日本においても、GIDの正規医療から逸脱していく事例は少なくないと思われる（実数は分からないが、性的少数者の自助グループでは散見される）。そして、このような事態は、既存のGID者支援では、当事者の生き方をよりよくサポートすることができないことも意味しており、新たな支援を考えるべき余地が残されている。

支援に関するこれらの手がかりは、本事例のみならず、多様なGID者と家族支援に有効なものであるといえる。性的少数者の自助グループで心理スタッフの1人として活動する者として、モデルの実践を行いながら、必要に応じてモデルを改変し、より柔軟なモデル構成、実践の変革を目指したい。

脚注

注1）本論で扱った5つの研究は、3年にわたるインタビューのなかで発表されたものである。ただし、その1年前からハルとのインタビューは開始していたため、4年とした。

注2）グラウンデッド・セオリー・アプローチ（GTA）とは、社会学者のGlaser, B & Strauss, Aによって提唱された質的な社会調査の1つの手法である。現象を説明するための理論構築を目的として、インタビューや観察などによって得られた結果を文章化し、特徴的な単語などをコード化し、データを作成し、分類していく。木下は、より実践的な活用のための理論生成の方法として規定しなおし、修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチを提唱した。

引用文献

- 針間克己. (2008). 性同一性障害と精神医学. 臨床心理学, 8(3), 354-359.
- 東 優子. (2005). 当事者に対する社会的支援: 誰の, 何を支援していくのか. 山内俊雄(編), 性同一性障害の診かたと治療 (pp.435-438). モダンフィジシャン 内科系総合雑誌, 25(4). 東京: 新興医学出版社.
- 印東太郎. (1973). 心理学におけるモデルの構成. 印東太郎(編). モデル構成. 東京大学出版会. 1-28.
- 葛西俊治. (2005). 解釈的心理学研究における理論的基盤とアブダクションに基づくモデル構成法. 札幌学院大学人文学会紀要, 78, 1-26.
- 木下康仁. (2003). グラウンデッド・セオリー・アプローチの実践—質的研究への誘い. 弘文堂.
- 木下康仁. (2007). ライブ講義M-GTA 実践的質的研究法—修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチのすべて. 弘文堂.
- 西條剛央. (2003). 「構造構成的質的心理学」の構築: モデル構成的現場心理学の発展的継承. 質的心理学研究, 2, 164-186.
- 齊藤清二・岸本寛史. (2003). ナラティブ・ベイスト・メディスンの実践. 金剛出版.
- 荘島(湧井)幸子. (2006). 物語論アプローチへの《語り得ないもの》という視点導入の試み. 心理学評論, 49(4), 655-667.
- 荘島(湧井)幸子. (2007). ある性同一性障害者の自己構築プロセスの分析: 同一トランスクリプトによる知見の羅生門的生成. 京都大学教育学研究科紀要, 53, 206-219.
- 荘島幸子. (2008a). トランスジェンダーを生きる当事者と家族: 人生イベントの羅生門的語り. 質的心理学研究, 7, 204-224.
- 荘島幸子. (2008b). 「私は性同一性障害者である」という自己物語の再組織化過程: 自らを「性同一性障害者」と語らなくなったAの事例の質的検討. パーソナリティ研究, 16(3), 265-278.
- やまだようこ. (1986). モデル構成をめざす現場心理学の方法論. 愛知淑徳短期大学研究紀要, 25, 31-51.
- やまだようこ. (2002). 現場心理学における質的データからのモデル構成プロセス. 質的心理学研究, 1, 107-128.
- 湧井幸子. (2006). 「望む性」を生きる自己の語られ方: ある性同一性障害者の場合. 質的心理学研究, 5, 27-47.

(日本学術振興会特別研究員 教育方法学講座 博士後期課程 3 回生)

(受稿2008年9月8日、改稿2008年12月1日、受理2008年12月11日)

The Psychological and Relational Structural Models for a Person
with "Gender Identity Disorder":
Generation of the Three Upper Models of "Discrepancy,"
"Connecting," and "Stepping away from Oneself"

SHOJIMA Sachiko

I have longitudinally interviewed for four years a person with "gender identity disorder" (GID) who wished to cross gender because of his gender dysphoria, and his family. The interview data were analyzed using a narrative approach. The aim of my study is in totally recognizing him and his family's experience of living with his GID. In this paper, my five qualitative studies were reconsidered in the perspective of generating models. Each psychological and relational model generated from five qualitative studies was integrated into upper models. Three upper models were presented here: "discrepancy," "connecting," and "stepping away from oneself." In discussion, we considered how these three models functioned in light of a life story of someone with GID and his or her family. This paper enabled a deeper experience of living as a person with GID and living with person having it by connecting all their narratives that were separated from each other's study and reconsidering the psychological and relational models in line with time axis of their life story.